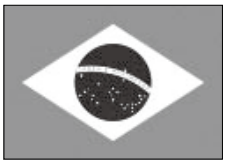
第59回

33か国リレー通信



ブラジル

República Federativa do Brasil

ジャングルだけではないアマゾン

関口 ひとみ

ブラジルがポルトガル人に発見されてから約520年、そのポルトガル支配から独立して今年で200年を迎える。筆者は、ブラジルの6都市で勤務し、各地で多様性に満ちたブラジルを体験した。多民族で形成されるブラジル人は、陽気で寛大という形容詞で表され、大半は親切で、例えば、道を尋ねると周囲から人が集まってきて教えてくれるが、それぞれが違った方向を示し、余計に迷子になった経験をされた方もいるだろう。困った人がいると声をかけずにはいられない世話好きな人たちである。東西南北の各地で暮らし、同じブラジル人でも、ところ変われば まるで違うと感じることが度々あった。

ブラジルをご存じの方には「あるある」の経験を共感してもらえると思うが、今回は、筆者が昨年まで3年間在勤したアマゾン地域に焦点を当ててみたい。あくまでも生活上の肌感覚であることを予め断っておきたい。

アマゾンは高温多湿で緑に覆われ、アマゾン河が街中を流れていると思われがちだが、気温こそ高いものの、全体に高い樹々が生い茂っている訳ではなく、支流も含めアマゾン河がどこでも流れている訳でもない。最近は環境問題で話題が絶えない地域であるが、その実情の多くは知られていない。南米大陸の9か国に広がるアマゾン熱帯雨林のうち、ブラジルは63%を占めている。多様性に満ちた生態系の保全と地域開発のため、1953年に、「法定アマゾン」が制定された。同地域最大のアマゾナス州は、19世紀終わりから20世紀初頭までゴムの産出により発展、州都マナウス市はその集荷地として繁栄を遂げた。市内にはヨーロッパのオペラ鑑賞のために、輸入資材で建築されたアマゾナス劇場、映画館等の娯楽施設やヨーロッパ調の邸宅が並んだ。しかし、マレーシアでゴムの栽培が始まると価格は暴落、衰退の道を歩み始める。その救世主となったのが、日本人移住者によるジュート栽培の成功であった。当時、南部で収穫されたコーヒーの多くは外国製のジュート袋に詰められていたが、戦前の日本高等拓殖学校卒業生が苦心惨憺した結果、良質のジュートはゴムに代わる産業として注目された。

筆者はアマゾンビギナーとして、教科書には載っていない、ブラジルの全国放送でも取り上げられない刺激的な毎日を体験した。熱帯雨林ならではのリズム、そこ

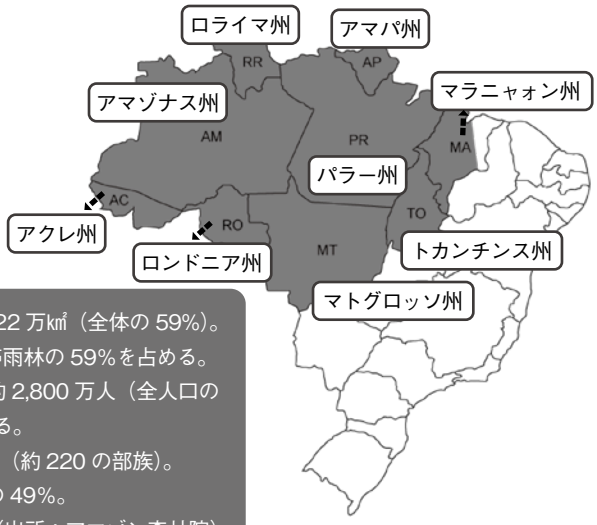


図　法定アマゾン

▶法定アマゾンの面積：522万㎢（全体の59%）。
▶ブラジルはアマゾン熱帯雨林の59%を占める。
▶2020年の推定で人口約2,800万人（全人口の14%に相当）が居住する。
▶先住民人口：約43万人（約220の部族）。
▶生態系はブラジル全体の49%。
（出所：アマゾン森林院）

に住む人たちが営む文化と習慣、そして何よりも自然に生かされているということを実感できた。「空飛ぶ川（アマゾン熱帯雨林の水蒸気を運ぶ気流）」や「季節は二つ：雨が降る夏、雨が降らない夏」や「南部が寒くなると気温が上がり、南部に夏が来るとやや涼しくなる」を体感した。5月に着任したが、現地の方に「暑いでしょ、でも乾季に入る9月からは酷暑だから」と言われた。実際に、アスファルトに反射する光で目が痛くなる程の暑さが続いた。男女共に日傘をさして歩く光景が印象的だった。

マナウスに到着した日、アマゾン料理の洗礼を受けた。郷土料理店で提供されたのはタンバキ（名物の淡水魚）とアリであった。とりわけアリの姿焼に驚いたが、レモングラス風味の香ばしさが意外と美味しかった。アロワナやピラルク等、日本の水族館で見られる珍しい淡水魚を普通に食べられることも驚きであった。着任1週間後に船で約3時間アマゾン河を上り、更に密林の中を歩いた施設の開所式に出席した。まるで『インディ・ジョーンズ』を想起させる冒険の始まりを感じた。

悲しいかな、マナウスは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大にともない、酸素ボンベ不足や死者数の激増による集団埋葬の悲惨な映像が世界中に配信されたことで広く知られるようになった。当時、その渦中にいた一人として実態を共有したいが、今回は紙面の都合上割愛させていただく。

アマゾン地域には課題も多い。その一つが環境への取り組みで、ブラジルの環境政策は何かと話題になる。とりわけ2019年に増加した森林火災により、ブラジル政府への批判が強まった。アマゾン地域の火災の多くは、牧草や二次林など伐採跡地を焼き払うもので、野焼きは乾季に行う方が有利とされ、その時期は空を煙が覆い、酷いときは視界不良で道路はもとより航空機も飛べず、交通網に支障を及ぼすケースがあるものの、マナウス市内にいる限り、煙を確認することは少ない。センセーショナルな報道のせいか、サンパウロ出張の際、避難しなくてもいいのかと心配された記憶がある。アマゾナス州の森林は水分を多く含み、伐採後乾燥しないと火が点きにくく、幹線道路沿いから始まる森林破壊は少ないとされている。

もう一つがベネズエラ避難民問題。2017年頃より周辺諸国へベネズエラからの避難民流出が急増した。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、2021年までに約550万人のベネズエラ人が国外に避難している。主な避難先はコロンビア、ペルー等の近隣諸国であるが、ブラジルもこれまで70万人以上を受け入れている。連邦政府は、ベネズエラ避難民受け入れ作戦を展開し、国境で避難民の受け入れ、スクリーニング、難民認定後、国内に移送している。一部はマナウスに移送され、国内他州への移動を待つ間、衣食住、教育、保健・医療サービス等を受けるが、国連からの助成は十分とは言えず、受け入れ側の州や市の財政を逼迫させている。着の身着のままでマナウスにたどり着き、交差点で、「金は要らない、仕事をください」と書かれた段ボールを掲げる幼い子を連れたベネズエラ人の姿が目立った。日本政府の支援に加え、日本企業もこれら避難民の雇用等を行っており、日系人が運営する野球チームは避難民を迎え入れ、市民交流に寄与している。

写真1　アリの姿焼き（筆者撮影、以下同）

写真2　タンバキ（淡水魚）のグリル

写真3　国立アマゾン研究所（INPA）の生物多様性保護プロジェクト：フィールドミュージアム

日本との関係

（1）日本企業

アマゾン地域の開発、ブラジルの主権、国家安全保障の確保、輸出入の自由化による原産品の競争力の強化を目的に、1967年に現地事業に税制恩典を付与する「マナウスフリーゾーン（ZFM）」が制定された。ZFM制定により多くの日本企業が進出し、農業を中心とした日伯関係は産業面でも強化された。マナウス市内ではこれら企業の看板が見られ、モノづくり技術に対する高い評価を感じた。

（2）日本語ポルトガル語バイリンガル学校

日本企業の活動や、ポップカルチャー、和食以外でも、災害からの復興の速さや最先端技術、道徳観等による日本への尊敬の念も大きい。その証の一つが、ブラジル唯一の公立の日本語ポルトガル語バイリンガル中学校である。在校生900人が日本語を学び、日本語による数学と理科の授業を受けている。同時に、日本の文化と道徳観も学ぶことができるとして、入学希望者が殺到していると誇らしげに語る校長先生が印象的であった。2020年には日本語ポルトガル語バイリンガル高校も創立された。

（3）マナウス日本人学校

文部科学省が認定している在外教育施設のうち、マナウス日本人学校は日本から最も遠い日本人学校である。入学式、卒業式、そして大運動会が重要な三大行事とされ、中でも運動会は「大」が付くほどスケールが大きい。日本企業が特別参加しているため、参加者数は1000人に上り、児童生徒は民族舞踊のボイダンスを踊り、最後は企業対抗リレーで締めくくる。昼食は、それぞれが用意するシュラスコで盛り上がる。肉ではなく、何と言ってもタンバキのシュラスコが格別に美味なのである。

（4）日系社会

ブラジルには世界最大の日系社会が存在し、無数にある活動は両国の絆をより強固なものとしている。今では、日系6世へと世代が進む中、若い世代は日系団体間のネットワークを拡大させている。ブラジル国内にとどまらず、ラテンアメリカ諸国やハワイ等にもその輪は広がっている。1世紀以上の歴史を有する日伯関係は、戦略的グローバル・パートナーシップと位置づけられ、政治、経済、人的交流のみならず、治安、司法、防災、環境、教育等幅広い分野で二国間協力が進展している。

マナウスでは、2019年に、日本人アマゾン移住90周年を記念して初の日本祭り（通称「ジャングル祭り」）が開催され、2日間で3万人の来場者があり、大きく盛り上がった。南部と比べて日系人が少ない北部や北東部で活動する小規模団体は、地域の政治家や有力者の支援を受け関連イベントを開催し、中には市の公式行事に指定されているものもある。

ブラジルで大人気の和食の普及は日系女性の活躍が背景にある。日本祭りでは婦人部の手料理が提供され、招待されたブラジル人たちも喜んで食している。どこか懐かしいふるさとの料理の数々は、この女性たちによって引き継がれていった。ただ、最近では、若い女性たちは忙しく、料理を作る時間がないなどの諸事情により、ケータリングへと形式が変化していると寂しい声も耳にする。

日本とブラジルの友好関係には、これまでもそうであったように、これからもそうであるように、日系社会の役割は極めて重要であり、その役割を担うソフトパワーは世代交代とともに、新しい形態へと進化し、その存在が増していくであろう。ブラジル各地で活躍する日系人をはじめとする多民族が織りなすブラジル特有の魅力の中で、知られざるアマゾンの営みは無限大である。一度旅行に行かれてみてはいかがでしょう。日本では体験できない大冒険が待っているかもしれません。

（せきぐち ひとみ　前在マナウス日本国総領事）

写真４　バイリンガル校における理科の授業

写真５　大運動会でボイダンスの披露（マナウス日本人学校の児童生徒）

写真６　西部アマゾン日伯協会主催のジャングル祭り（盆踊り）